

清須城本丸出土の 木製刀形について

● 鈴木正貴

清須城本丸東側の部分の発掘調査では木製刀形が出土していたが、これまでに報告書を含めて全く資料紹介されていなかった。本稿はこの木製刀形の資料紹介を行うとともに、鉄先の出土状況も加味して、清須城本丸普請における祭祀行為が存在した可能性を指摘した。

1. はじめに

1996年度から1997年度にかけて、清須城本丸東側の部分の清洲城下町遺跡の発掘調査（96区・97C区）が実施された。この調査で織田信雄が改修したと推定される本丸東面石垣とそれに付随する遺構群が検出されており、後期清須城を考える上で、その調査成果は注目されているところである。この地点の発掘調査報告書は、2002年度に『清洲城下町遺跡Ⅷ』として刊行された（宮腰・鈴木編2002）が、97C区で出土した木製刀形1点（図1）が整理作業の過程でのミスのため報告されていない。本稿は、この97C区から出土した木製刀形について資料紹介し、出土した背景について若干の考察を加えるものである。

清須城は濃尾平野を南流する五条川中流域に所在しており、戦国時代には尾張守護所が設置された拠点的城市である。織田信長が居城したことで有名であるが、守護斯波氏が守護館を構えたのは五条川左岸と推定され、これが前期清須城と評価されている。その後、織田信長次男である織田信雄が天正14（1586）年に伊勢長島城から移転し清須城を大改修したとみられ、五条川右岸の本丸を中心とした遺構群が後期清須城と位置付けられている。その後の研究の進展より、前期から後期への移行過程は単純ではないことが推測されているが、問題となる97C区は後期清須城の本丸東端部に該当する。

2. 資料紹介

今回紹介する木製刀形は、97C区のⅢ G9j グ

リッドで検出2として1997年12月9日に取り上げた木製品である。他に出土状態に関する具体的な記録はないが、木製品の残存状態が良好であるため、出土位置は埋積環境が滞水状態を長期間維持した状況であったと想定される。

さて、1997年12月9日の調査日誌には

- （1）城跡前（SW01）SD05 東側 検Ⅰ～検Ⅲ
- （2）SW01 前拡張（11j）グリッド 検Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
- （3）SW02 南側 検Ⅱ、Ⅲ 植物質敷物（検Ⅱ、Ⅲ）
- （4）杭列 しがらみ 清掃
- （5）D地点 グリ石瓦溜 清掃
- （6）特筆すべき遺物、遺構 杭列としがらみ 高下駄の歯、漆椀、箸（数多く） 曲物（弁当箱？） 天目（大小） おろし皿 焙烙 木製品6 コンテナ10箱<以下略>

と記されている。この中で、Ⅲ G9j グリッドの検出2に該当する部分は（3）SW02 南側 検Ⅱのみであり、問題の木製刀形は（6）の木製品6点のうちの1点と推察される。SW02 南側を掘削した結果、SW02に平行して構築された柵列SA07が検出された。SA07の遺構図（報告書第15図）の原図には、木製品と注記されたものが2ヶ所（赤色で示した細長い材）あり、両者とも長さは60cm程度に表現されているが、刀形であるか否かは特定し難い（図2）。北東側のものと仮定すればSA07の構成材の一部であった可能性が考えられ、南西側のものと仮定すればSA07及びSW02前の基礎部分に埋没していたものと推定される。

柵列SA07は城下町期Ⅰ期の溝状遺構SX02

が埋没した後に、かつ石垣 SW02 より前に構築されたものである。他の柵列 SA04 から SA08 と合わせてその内側の地盤を固めたものと考えられることから、上記の推測が当たっているとすれば、木製刀形は石垣 SW02 構築前に埋置された可能性が高い。

刀形は、保存処理を実施する前の全長が 68.7cm を測り、長さが 2 尺以上あることから太刀をモチーフにしたと思われるが、打刀の可能性は残される。一般に平安時代を境に直刀から湾刀に変化するといわれる（本間 1939）が、本品は反りが無くむしろわずかに逆に湾曲するくらいの直刀形であり、これは木製品としての材質の特徴が形状に影響している可能性が高い。刃部は幅 0.5cm 程度薄く削る加工があって切刃造を模したとみられ、棟（刃の反対側）は断面形状の平棟である。先端部の切先（^{ぼうし}鉋子）は短い小鉋子で直線的な切先である。刃部と柄部の境界には長さ 6cm 程度のわずかに幅広の部分があり、^{はばき}鉋に相当すると思われる。柄部の大部分は断面長方形で、特に細かい加工は認められない。柄部の先端は柄頭を保護する冑金を表現したと思われる段差があり、刃の反対側にある突出部は冑金に腕貫緒を通すための猿手を模したのかもしれない。刃文は直刃状にヤリガンナで削られたものとみられ、切先部分は細かく丁寧に作られている（図 1）。

本品は出土状況から城下町期Ⅱ期末頃に埋置されたものと思われるが、柄部の拵えを持つ直刀形であり一般的な刀剣類の変遷とは合致しない。しかし、切先から刃文および柄部の拵えなどの表現は写実的で精巧な作りであると評価できる。

3. 木製刀形出土の意味

木製刀形は実用品とは考えにくく、雛形か形代として使用されたものと考えられるが、出土状況から見て形代として埋設されたものと推察される。大平によれば飛鳥時代以降（中世を含む）の木製祭祀遺物には木製模造品（人、馬、刀、舟、鳥、鋤先、斎串など）がある（大平 2008）と記述され、本品も木製祭祀遺物と位置付けられる。木製刀形は石垣構築に係る祭祀遺物の可

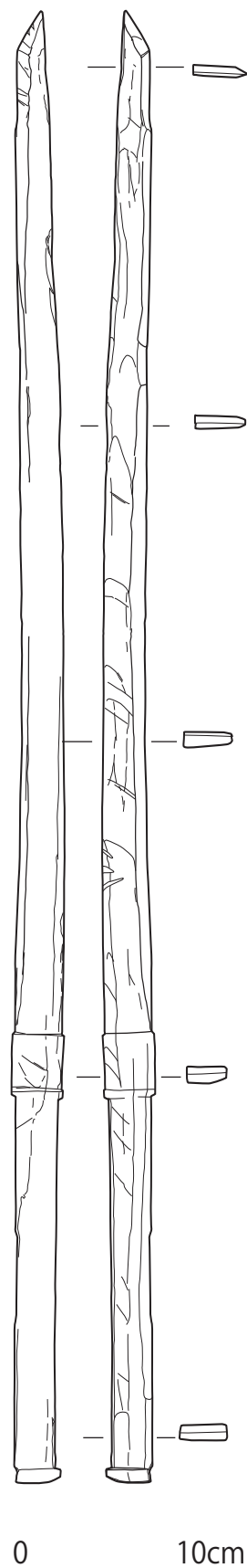


図1 木製刀形実測図（1/4：保存処理前）

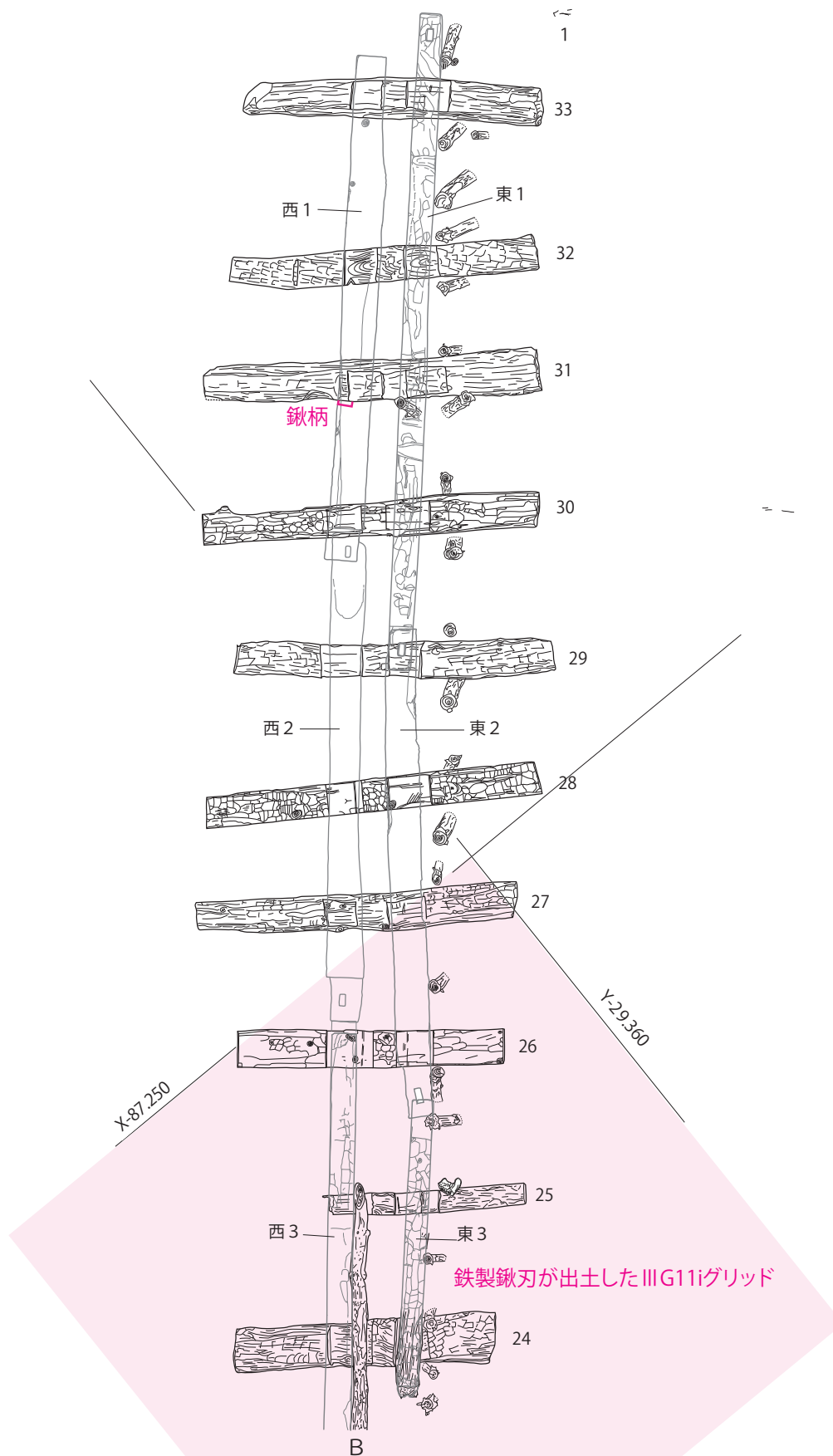


図3 鍬出土状態図 (1/50 報告書第13-1図を一部改変)

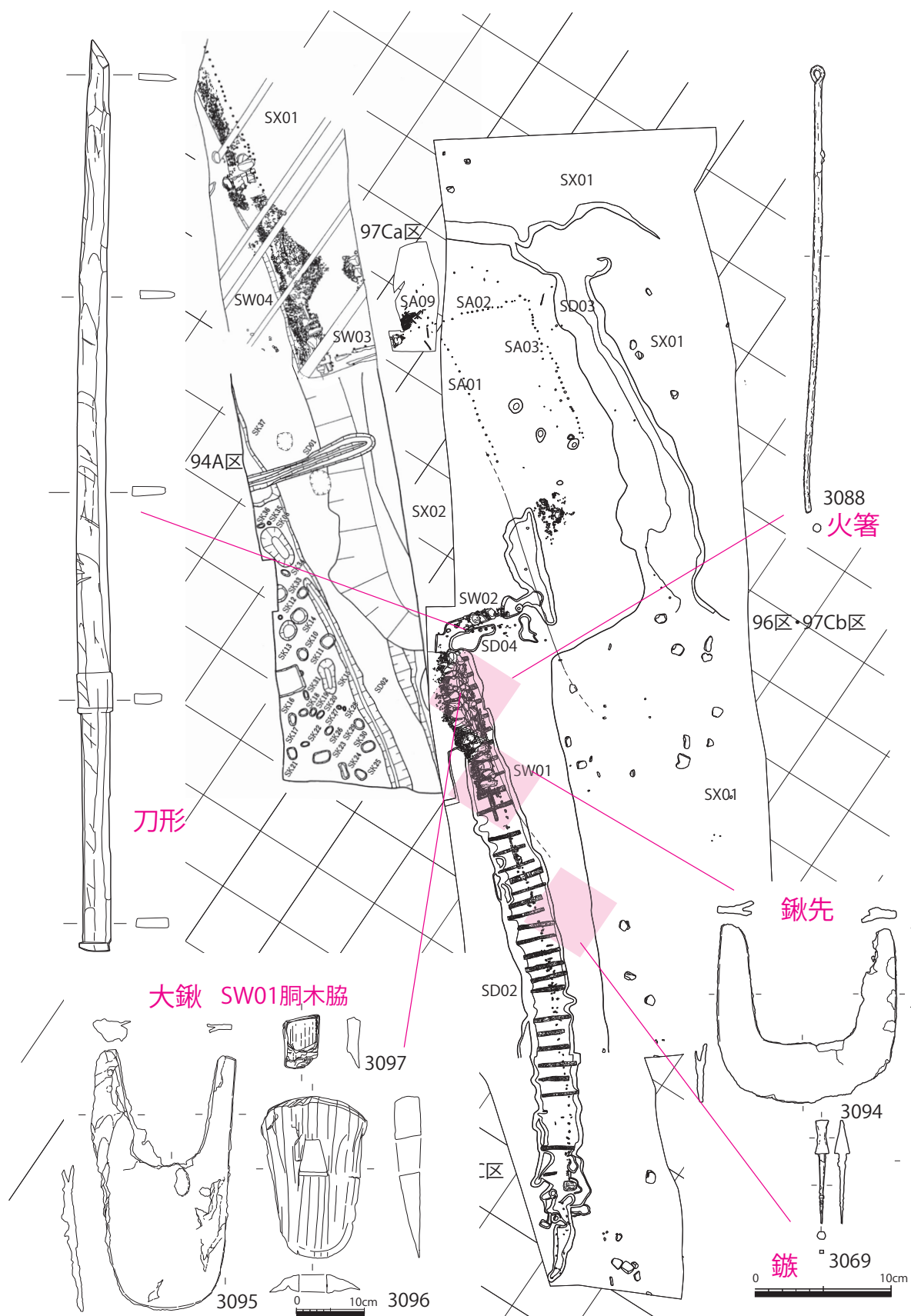


図4 94A・96・97C区祭祀関連遺物出土分布図 (1/400 報告書第264図を改変)

能性が考えられるが、この他に注目すべき遺物に鍬先2点がある(図3・4)。なお、この他に火箸と鏃の存在が確認されるが、特に追加情報はなく指摘するにとどめておく。

報告書第211図3094は97C区のⅢG11hグリッドでSW01裏込めとして1998年1月13日に取り上げた鉄製品である(図4)。

1998年1月13日の調査日誌には

(1) SW01裏込め 胴木部分の落とし ツラ出し

SW01横 柵部分 ラスト出し
胴木清掃

SX01瓦取り上げ 柵出土 杭列出土
石垣胴木

(2) 特記すべき遺物 SW01裏込めより鍬or鋤の刃 SX01(瓦だまり)瓦多数<以下略>

と記されている。この中で、問題の鍬先は清須城本丸東面石垣「SW01裏込めより」出土した「鍬or鋤の刃」が該当するが、これ以上詳しい出土状況を知ることはできなかった。全長約13cm、幅約13cmで横断面形はV字形を呈す。石垣の裏込めから出土しているので、石垣構築段階で埋没したものと理解される。

報告書第212図3095～3097は、97C区のⅢG9iグリッドでSW01胴木脇として1998年1月14日に発見された鉄製品と木製品である。

1998年1月14日の調査日誌には

(1) 胴木部分清掃 胴木脇 北西より 鍬出土
(1580年代か?)

SW02北側 検出Ⅲ落とし→SX02(漆
椀出土)

SX01内 杭列 柵(倒れたもの) 瓦だ
まり 石垣胴木<以下略>

と記されている。この中で、問題の鍬先は清須城本丸東面石垣SW01の基礎構造である「胴木脇 北西より 鍬出土」が該当する。SW01の石垣石材を除去したのちに梯子状に組まれた土台木が検出されているが、この遺構図(報告書第13-1図)の原図には、枕木状の土台木31の中央部直下に少し横にはみ出る形で「鍬先」と

注記されたものが描かれていた(図3)。この描写から第212図3095の鍬先は土台木が据えられる直前に置かれたものと推定できる。全長約40cm、幅約21cmの大鍬の鍬先で横断面形はV字形を呈す。3095の内側には鍬身3096が嵌め込まれており、平面台形の孔が穿たれている。孔に鍬柄が取り付け付いたものと思われるが、これを固定するための楔3097も出土している。この残存状態からみて、大鍬を使用後に柄のみ取り外したものと考えられる。

4. まとめ

以上の検討の結果、後期清須城本丸東面の石垣南半部を構築する際に、木製刀形と鍬先が意図的に埋納されたものと推測され、石垣が構築される前に祭祀が行われていた可能性が考えられた(図4)。この祭祀行為は、状況からみて本丸普請の地鎮めが行われたものであろう。

最後に、このような重要な資料が報告書に掲載されなかったこと、およびそれが約20年もの長期間にわたり資料紹介されなかったことを、関係者の一人として深くお詫び申し上げる。この資料紹介が、城普請における祭祀行為の研究に寄与し進展することを願って止まない。

引用・参考文献

- 大平茂 2008「第4章 祭祀考古学の体系」『祭祀考古学の研究』雄山閣
本間順治 1939『日本刀』岩波新書
宮腰健司・鈴木正貴編 2002『清洲城下町遺跡Ⅷ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第99集